末松A遺跡
末松しりわん遺跡

―民間開発・地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査―

2001年

石川県野々市町教育委員会

例　　言

1．本書は、石川県石川郡野々市町末松１丁目地内に所在する末松Ａ遺跡、末松しりわん遺跡の発掘調査報告書である。この内、末松Ａ遺跡については当初末松Ｃ遺跡と呼称していたが、その後の遺跡地図等との照合により本報告をもって末松Ａ遺跡に改めるものとする。

2．それぞれの調査原因及び期間、面積等については以下に示すとおりであり、現地での発掘調査は横山貴広（野々市町教育委員会文化課）が担当し、田村昌宏（現石川県埋蔵文化財センター派遣）の補助を受けた。

遺　跡　名	調　査　原　因	調査面積	調　査　期　間
末　松　Ａ　遺　跡	農作業小屋建設（民間開発）	約 80㎡	着手：平成４年４月２日 完了：平成４年４月17日
末松しりわん遺跡	地方特定道路整備事業	約150㎡	着手：平成８年９月30日 完了：平成８年12月19日

3．遺物の整理及び報告書作成に必要な記録資料整理にあたっては、洗浄・記名・選別・接合の各作業を伊藤忠行、猪又邦子、彦田洋子、佛田正子、谷内茂代が、また接合・復元・実測・トレースを竹田倫子、野村祥子がおこなった。その他、図版作成・遺構図トレース・写真撮影を横山が担当した。

4．本書の執筆及び編集は横山がおこなった。

5．図版の縮尺はすべて図上に表示し、水平基準線レベルは海抜高である。なお方位はすべて磁北を指す。

6．調査によって得られた資料は、すべて野々市町教育委員会が一括して保存管理している。

7．発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の方々や機関からご教示、ご協力をいただいた。記して深甚の謝意を表したい。（敬称略・順不同）

垣内光次郎・北野　博・中屋　克彦・西村外喜雄・福島　正実・本田　秀生・安　英樹

（財）石川県埋蔵文化財センター

目　　次

第１章　位置と環境 …… 3

第１節　遺跡の位置 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3

第２章　末松Ａ遺跡 …… 10

第１節　調査の経緯と経過 …… 10
第２節　遺構と遺物 …… 12
第３節　まとめ …… 15
遺物観察表 …… 19

第３章　末松しりわん遺跡 …… 22

第１節　調査の経緯と経過 …… 22
第２節　遺構と遺物 …… 25
第３節　まとめ …… 26
遺物観察表 …… 29

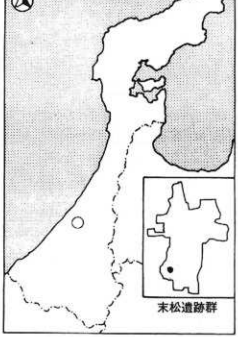
写真図版 …… 31

報告書抄録 …… 38

第1章　位置と環境

第1節　遺跡の位置

石川郡野々市町は面積約13.56㎢、人口約43,000人を数える日本海側随一の雄町であり、南北に長い石川県の中央やや南側に位置している。町域は県下最大の河川である手取川によって形成された手取扇状地北東側の扇央部から扇端部を占めており、一見平坦に見える地勢も町の南北端での標高差は約35ｍを測る。扇径約12㎞、展開度約110度の規模を有するこの手取扇状地は、藩政期に加賀百万石を支えた経済基盤のひとつであり、近年まで続く大穀倉地帯としてのどかな田園風景の中に集落が点在する牧歌的なたたずまいを見せていたが、1970年代に始まった農地の市街化に伴い、幹線道路の整備や広範囲に及ぶ土地区画整理事業の実施、それに呼応する巨大な商業資本の進出などで近代的な都市景観へと急速な変貌を遂げており、その発展は今もとどまる事を知らない。



第1図　遺跡の位置

末松A遺跡、末松しりわん遺跡が存在する野々市町末松地区は町域の南西端に当たり、西を松任市に、南を鶴来町に接しており、集落の東に沿って走る国道157号線と南に沿って走る加賀産業道路が交差する現代の交通の要所とも言える地域の北西側一帯を占めている。周辺は町内でも御経塚地区と並んで遺跡の集中する所として知られ、これまでにも国道157号線建設や農村活性化住環境整備事業などを契機として多くの発掘調査が実施されており、貴重な成果も徐々に公表されつつある。

第2節　歴史的環境

野々市町南部地区を中心とした手取扇状地右岸における遺跡の展開は宮本の仕事ですでに詳しく述べられており（宮本 1991）、その後実施（報告）された調査の詳細を加えたとしても未だ氏の業績を超えるものは管見にない。また、扇状地での遺跡の動態を想定される島状微高地と利水関係との関連から検証した本田の仕事（本田 2000）も当地における遺跡分布の理解を助けるものとして評価できる。上林新庄遺跡を中心とした野々市町南部地区の試掘、発掘調査全般（横山 1998, 99, 2000）を担当した筆者としても、本田との議論の中で氏の意は十分理解しており、賛同するものである。したがって、ここでは紙数の制限もありこれらの検証と重複する記述は避け、それ以降に確認された新たな遺跡分布の事実を記述することとする。

野々市町教育委員会では1999年度より着工された野々市町中南部土地区画整理事業[1]に先立ち、1998年度に対象面積約45.6haの全域について埋蔵文化財分布確認調査を実施した（第3図）。その結果、対象地区内で新たに4遺跡[2]の分布を確認し、その総面積は実に85,000㎡にのぼる。現時点では調査開始2年目の途中ということで、詳細については調査の進展及び今後の検討を待たねばならないが、担当者の所見によれば一部下層に縄文時代後期から晩期を含むものの主体は中世であり、古代については流れ込みのような状態で遺物が散見されるのみであり、明確に遺構に伴うものは確認されていないということである。また、これら4

遺跡は南から上新庄ニシウラ遺跡、上林新庄遺跡、下新庄アラチ遺跡、栗田遺跡と続く木呂川沿いに分布すると思われる微高地に展開する遺跡群の延長線上にあるものと考えられる。確認調査の時点で調査未着手の遺跡推定地の一部より古代の遺物を表採しており、また現在調査中の遺跡が想定される中心部分を逸れていることを考え合わせると安易に速断はできないが、野々市町南部地区及び栗田遺跡での調査結果を通して抱いた「木呂川水系沿いに分布する島状微高地に展開する遺跡は古代から中世にかけて南から北へ徐々に移動していくのではないか」[3] というイメージは依然可能性を帯びているように思える。

視点を変えて手取扇状地扇端部に目を移して見ると、野々市町の北西端に当たる地域でも同じく2000年度より組合施行による大規模な土地区画整理事業[4]が着工されており、1999年度に事前の埋蔵文化財分布確認調査を実施している。その結果やはり4箇所の新たな遺跡[5]が確認され、合計面積は中南部地区を上回る173,130㎡にのぼる広大なものである（第4図）。この内、最大の三日市A遺跡は現在の三日市集落を全て含む広い範囲に広がっており、単独で約104,340㎡もの面積を占める。現地での本発掘調査は今年秋に1,300㎡程度を実施したものの遺跡推定地の縁辺に当たり、その性格については依然不明な部分が多い。分布確認調査で確認した遺物の様相からは、全体に中世段階のものを中心としながら三日市A遺跡において弥生時代末のものも散見されるが、層位的差異は確認されていない。[6]

以上、上記2件の区画整理事業に係る発掘調査はその緒についたばかりのものであり、現段階では各地域での遺跡の内容を問えるものでは無いため、ここではその紹介のみにとどめておく。

1　現在の野々市町栗田・三納・藤平・薬平田の各町内に跨る地域

2　三納アラミヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡・三納ニショサ遺跡・藤平田ナカシンギジ遺跡
以前より知られていた栗田遺跡については南～東～北、北東限の範囲を確定できたことに意義がある。（栗田遺跡約12,000㎡－内数）

3　必ずしも時間的な連続性が認められる訳ではなく、また同一構成員による移動を想定している訳でもない。

4　野々市町北西部土地区画整理事業。現在の野々市町二日市町・三日市町・徳川町・郷町に跨る地域であり、総施行面積は約65.43haにのぼる。

5　三日市A遺跡・三日市ヒガシタンボ遺跡・徳用クヤダ遺跡・郷クボタ遺跡
以前より知られていた二日市イシバチ遺跡についてはその南限が確定され、対象区内の面積は約14,310㎡である（内数）。また、郷クボタ遺跡については松任市に所在する横江C遺跡の一部と考えられる。

6　三日市A遺跡は現地面より遺構確認面までが30～40cmと浅く、床土直下に薄い黒色土を扶むのみである。

文　献

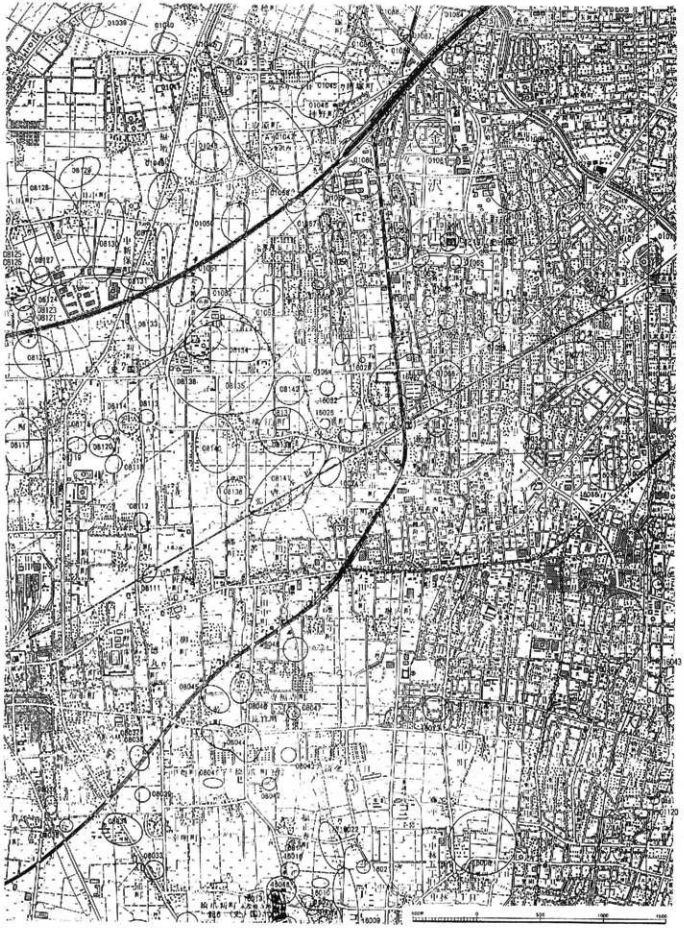
宮本直也　1991　「栗田遺跡の位置と環境」『栗田遺跡発掘調査報告書』（社）石川県埋蔵文化財保存協会

本出秀生　2000　「遺跡の位置と周辺の環境」『野々市町末松遺跡群』（財）石川県埋蔵文化財センター

横山貴広　1998　『上新庄ニシウラ遺跡』野々市町教育委員会

　　1999　『下新庄アラチ遺跡』野々市町教育委員会

　　2000　『上林新庄遺跡・上林古墳・上林テラダ遺跡・下新庄タナカダ遺跡』野々市町教育委員会



第２図　周辺の遺跡（1/30,000）　「石川県遺跡地図」1992より

遺跡地図凡例

「石川県遺跡地図」石川県教育委員会1992より

野々市町

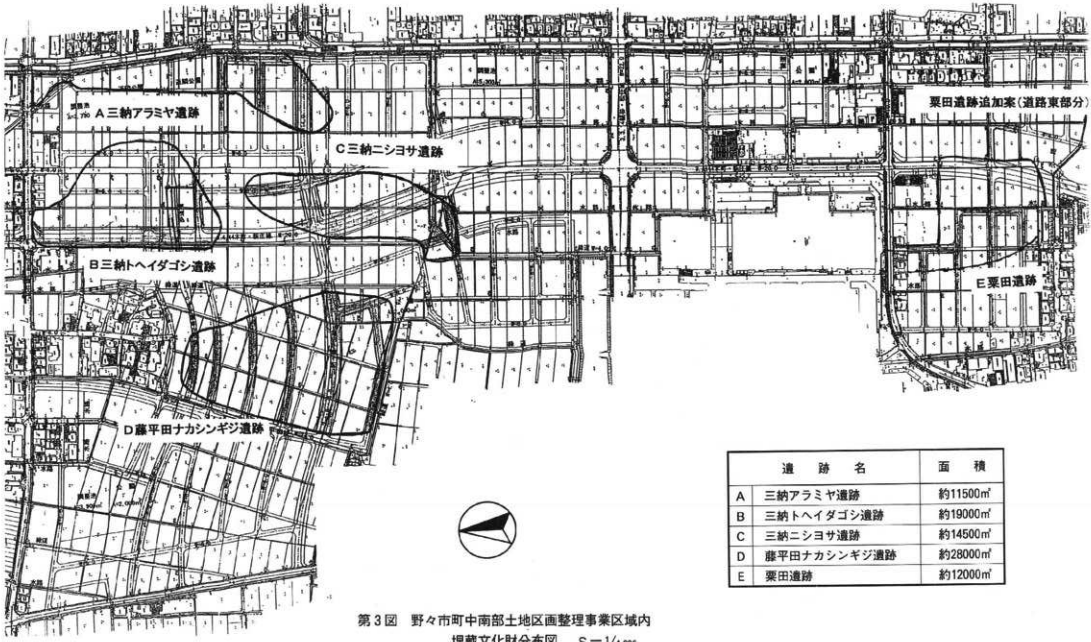
16006	下新庄アラチ遺跡
16008	粟田遺跡
16009	末松A遺跡
16010	末松B遺跡
16011	末松福正寺遺跡
16012	末松古墳
16013	末松廃寺
16014	末松C遺跡
16016	福正寺跡
16018	末松ダイカン遺跡
16020	古元常館跡
11021	末松信濃館跡
16022	清金アガトウ遺跡
16023	三林館跡
16024	二日市イシバチ遺跡
16025	長池キタバシ遺跡
16026	長池ニシタンボ遺跡
16027	御経塚遺跡
16029	御経塚経塚
16030	御経塚シンデン遺跡
16031	御経塚シンデン古墳群
16032	御経塚オッソ遺跡
16033	野代遺跡
16034	上宮寺跡
16035	押野館跡
16036	押野タチナカ遺跡
16037	押野ウマワタリ遺跡
16038	押野大塚遺跡
16039	冨樫館跡
16040	高橋ウバガタ遺跡
16043	扇が丘ハワイゴク遺跡

金沢市

01039	下安原遺跡
01040	安原工業団地B遺跡
01041	安原工業団地A遺跡
01042	緑団地地下水処理場遺跡
01043	緑団地公園遺跡
01044	上安原緑団地遺跡
01045	南塚遺跡
01046	びわ塚古墳
01047	上安原遺跡
01048	中屋ヘシタ遺跡
01049	福増遺跡
01050	中屋遺跡
01051	下福増遺跡
01052	中屋サワ遺跡
01053	上荒屋遺跡
01055	上荒屋住宅遺跡
01056	矢木マツノキダ遺跡
01057	矢木ヒガシウラ遺跡
01058	上安原陸橋遺跡
01059	矢木ジワリ遺跡
01060	森戸バイパス遺跡
01061	森戸本町遺跡
01062	森戸住宅遺跡
01063	新保本町西遺跡
01064	新保本町チカモリ遺跡
01065	新保本町東遺跡
01066	新保本町ツカダ遺跡
01067	新保本町南遺跡
01068	八日市B遺跡
01069	八日市サカイマツ遺跡
01070	八日市ヤスマル遺跡
01072	押野西遺跡
01073	押野大塚古墳
01074	西金沢新町遺跡
01075	日本たばこ金沢工場遺跡
01076	保古町遺跡
01077	黒田B遺跡
01078	古府遺跡
01079	黒田町三角点遺跡
01080	黒田町遺跡
01081	松島ナカオサ遺跡
01082	高畠遺跡
01084	古府クルビ遺跡
01085	おまる塚古墳
01086	宇佐神社古墳
01087	北塚古墳群
01088	北塚遺跡
01120	大額キョウデン遺跡
01121	扇台遺跡
01125	米泉遺跡
01400	馬替遺跡

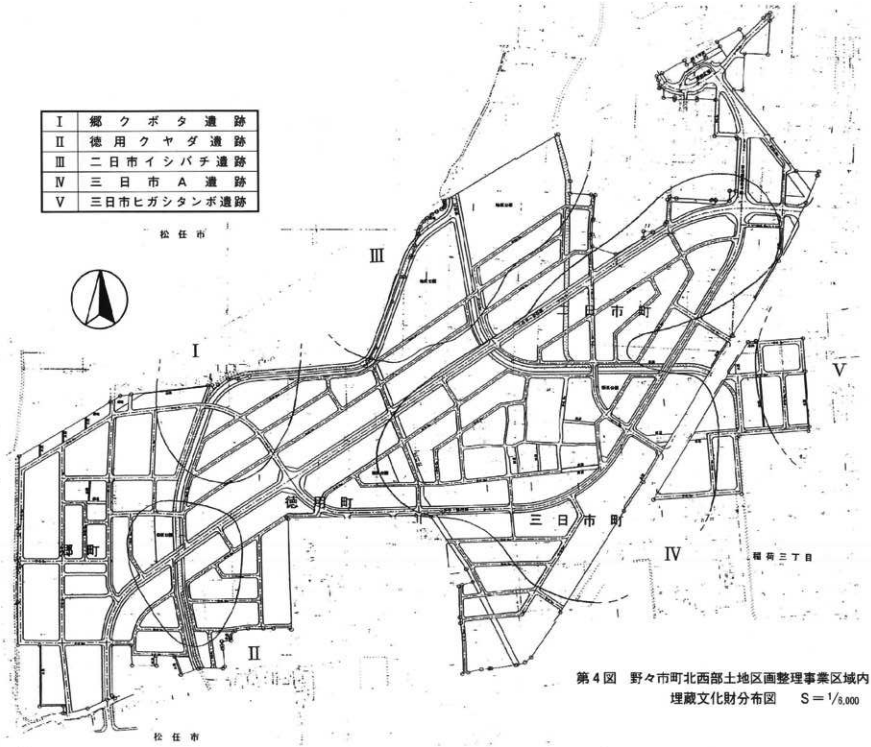
松任市

08033	三浦常在光寺跡
08034	三浦遺跡
08035	若林長門館跡
08036	倉光館跡
08037	幸明経塚
08038	西方寺跡
08039	幸明遺跡
08041	橋爪ガンノアナ遺跡
08042	橋爪松の木遺跡
08043	橋爪遺跡
08044	長竹遺跡
08045	乾町遺跡
08046	専福寺遺跡
08047	高田遺跡
08048	田中ノダ遺跡
08111	五歩市遺跡
08112	あさひ荘遺跡
08113	福増遺跡
08114	寝上市左エ門館跡
08115	福増東川遺跡
08117	坊の森遺跡
08118	宮永市境出遺跡
08119	宮永雁鬼遺跡
08121	宮永遺跡
08122	宮永B遺跡
08123	旭小学校遺跡
08124	一塚オオミナクチ遺跡
08125	一塚遺跡
08126	一塚墳墓・古墳群
08127	八田小鮒遺跡
08128	八田中遺跡
08129	八田中中村遺跡
08130	八田中ヒエモンダ遺跡
08131	八田中アレチ遺跡
08132	中新保遺跡
08133	下福増遺跡
08134	横江荘々家跡
08135	横江荘遺跡
08136	横江ゴクラク寺遺跡
08137	横江館跡
08138	横江A遺跡
08139	横江B遺跡
08140	横江C遺跡
08141	横江D遺跡
08142	横江古屋敷遺跡

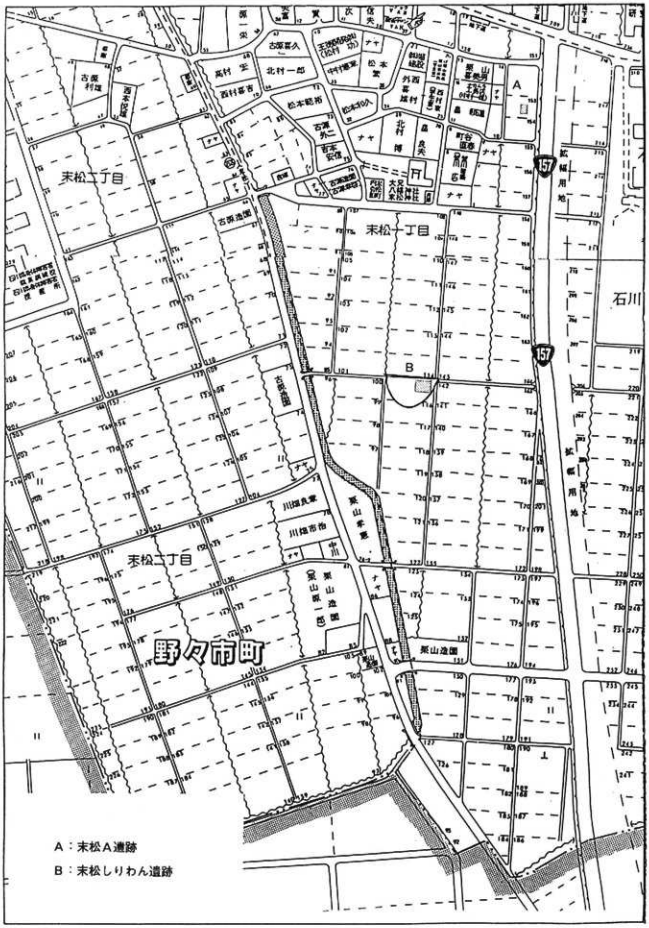


	遺　跡　名	面　積
A	三納アラミヤ遺跡	約11500㎡
B	三納トヘイダゴシ遺跡	約19000㎡
C	三納ニシヨサ遺跡	約14500㎡
D	藤平田ナカシンギジ遺跡	約28000㎡
E	栗田遺跡	約12000㎡

第３図　野々市町中南部土地区画整理事業区域内
埋蔵文化財分布図　S＝1/4,000



第4図　野々市町北西部土地区画整理事業区域内
埋蔵文化財分布図　S＝1/8,000



第５図　末松Ａ遺跡・末松しりわん遺跡調査区図　　Ｓ＝1/3,000

第２章　末松Ａ遺跡

第１節　調査の経緯と経過

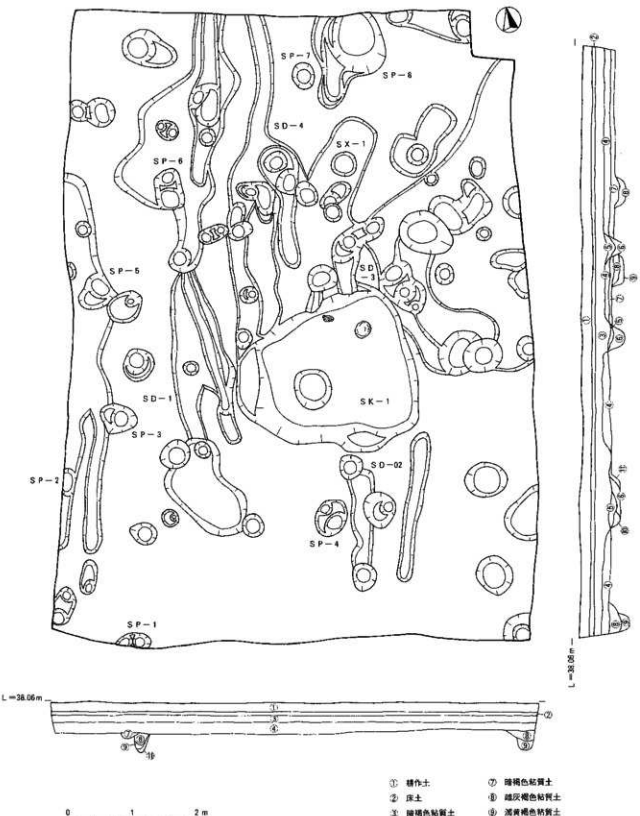
調査対象となった石川郡野々市町末松１丁目153-1については、平成３年11月16日付で開発を目的とした農地転用に係る埋蔵文化財所在調査の依頼が地権者である西村玉喜氏より提出された。これを受けて、野々市町教育委員会では遺跡地図での周辺の遺跡の分布状況や、国道157号線建設に先立ち石川県立埋蔵文化財センターにより実施された過去の発掘調査結果と併せ、当該地には埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、翌11月22日に現地での発掘調査が必要である旨の回答をした。その後の協議の結果、西側に建設予定のビニール製育苗ハウスについては簡易的な構造物であるため盛土による現状保存とし、東側に建設される農業用倉庫部分約80㎡について翌年度４月当初より本発掘調査を実施する旨で合意を得た。年度も押し迫った平成４年３月後半、事業主より文化庁長官に宛てて文化財保護法第57条の２第１項の届け出が出され、４月８日付教文収第７号により周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知が届けられている。また、発掘調査の実施については発野教社第39号により法第98条の２第１項の届け出がなされ、４月からの調査着手に備えた。その後の経過は以下のとおりである。

〈調査日誌抄〉

４月２日(木)　調査区設定、表土除去作業開始。調査区狭小につき午前中で終了。
４月３日(金)　ユニットハウス建て上げ、調査機材搬入。
４月６日(月)～13日（月）　遺構検出、同掘進作業。
４月14日(火)　遺構完掘、遺物取り上げ。平面図作成用の杭打ち作業実施。
４月15日(水)　写真撮影。遺構実測、セクション実測作業。その他、若干の補足調査を実施。
４月16日(木)　実測図にレベル記入。ユニットハウス、調査用機材撤収。本日で現場作業終了。
４月17日(金)　調査区埋め戻し作業。

平成４年度の事業も終盤を迎えた平成５年１月５日、発野教社第３号で発見届、保管書をそれぞれ提出し、１月28日付教文収第639-2号で埋蔵文化財としての認定を受けた。これらのことを全て終了し、本事業に係る発掘調査を終えた。なお整理作業については、洗浄を当該年度に、それ以降の作業を平成12年10月～12月にかけて行っている。

発掘調査参加者　北村三千子・栗山　久・古源　きよ・吉本　智子
整理作業参加者　竹田　倫子・野村　祥子



第６図　末松Ａ遺跡　遺構全体図（Ｓ＝1/60）

第２節　遺構と遺物

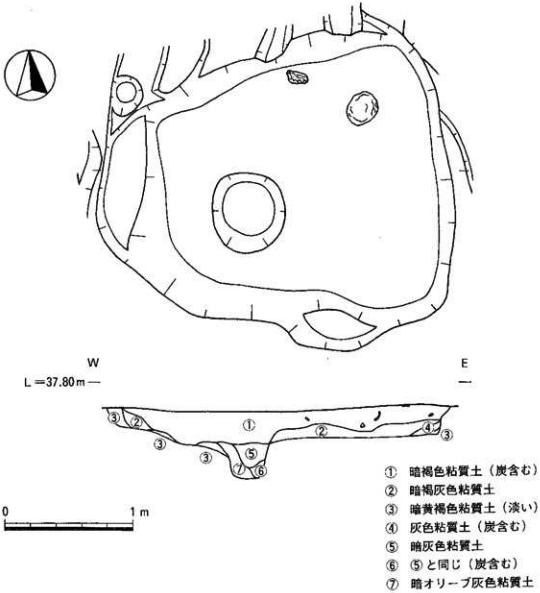
今回の調査区は、南北約10.8ｍ、東西約7.8ｍ、面積約80㎡の非常に狭小なものであり、遺構の密度は高いものの単独ではその性格にまで言及することは不可能である。しかし、平成10年度に農村活性化住環境整備事業を原因として(財)石川県埋蔵文化財センターにより実施された隣接地での調査結果に鑑み、北西に向けて流れる幅10ｍ程度の河川右岸に展開した集落跡の一部である可能性が高い。事実、掘立柱建物の柱穴状の様相を呈するピットも柱筋を通して数単位認められており、全景を知ることはできないが少なくとも２棟程度は存在するものと思われる。確認された遺構は土坑２基、ピット75基、溝12条、浅い窪み状遺構（ＳＸ）３基（第６図）であり、それぞれに量の多少は有れ遺物が伴う。実測し得たものは77点であり、大半がＳＫ－１より出土したものである。掲載したもの以外では小片が多く図化に耐えるものは無いが、四半世紀スパンでの分類は無理にしても概ね８世紀代の範疇に収まるものである。また、基本土層の観察では地山直上に堆積する暗灰色粘質土（第４層）の上位にある暗褐色粘質土（第３層）より掘り込まれた遺構も一定量認められ、２時期存在の可能性を示すが面的検証の困難さから第４層上面での検出は試みていない。

ＳＫ－１（第７～９図）

調査区ほぼ中央のやや南寄りに位置する略台形を呈する土坑である。長軸2.86ｍ、短軸2.56ｍ、検出面よりの深さ26㎝を測り、西側及び南側に小さなテラス状の緩い段を持つ。底面は均一な平坦面に整えられており、壁の立ち上がりは西側においてやや弛緩した様相を示す。遺物の大半は覆土中第１層とした炭化物を含む暗褐色粘質土より出土しており、若干第２層とした暗褐灰色粘質土中にも見られるが、両者の区別は炭化物の有無が主要因であり、色調・土質共に積極的な差異によるものではない。近隣での類例としては下新庄アラチ遺跡[2]や上林新庄遺跡[3]に見られるが、本例については周囲の状況が確認できず、また底面での焼土痕も認められないためその性格については言明し難い。

実測し得た遺物は40点を数え、その他当初は包含層遺物として扱っていた第９図41～46の６点も本土坑の上層出土遺物として同時に扱う。１～５は須恵器の蓋である。この内２は天井部までが確認され、丁寧な回転ケズリの後ナデを施している。４は、嘴状に屈曲する端部までが直線的に伸びる。口径については中型の２・３とやや大振りな４・５に二分されるようである。６～13は有台杯である。器体が直線的に立ち上がるやや小振りな６や、大きく開き伸びやかに立ち上がる７、その中間のタイプの８・９がある。高台は６を除けば外に力強く張り出すものが通有である。14～15は杯としたが、底部を確認していないものの中に有台杯を含む可能性がある。19はヘラ切の際の粘土皺が２次調整を受けずに大きく残されており、食膳具として見た場合非常に安定が悪い。24は身の深いタイプの稜碗である。口縁端部を外へ滑らかに摘み出し、体部中程に鋭い稜を持つ。外面下半をケズリ調整で仕上げる。25は大型の甕の体部である。器壁の薄さから肩部に近い部位と思われる。外面に平行タタキ、内面に同心円タタキを施す。26は内外面に赤彩を施す精緻な造りの椀である。ヘラ切痕を丁寧にナデ消した底部には「□木」の墨書が見える。位置や字の形から一文字ではなく別の漢字の旁である可能性が高い。27～40は土師器の甕である。

小型（27～30）、中型（31～33）、大型（34～40）の各法量が見られ、いずれも轆轤成形によるものである。41～46は前述のごとくSK－１の上面より集中して出土したものであり、その時点ではＳＫ－１の輪郭は確認していなかったものの掘り進む過程で同一の遺構に帰属するものと判断した。



第７図　ＳＫ－１　実測図（Ｓ＝1/30）

ＳＰ－１（第10図47）

調査区南西隅に位置する双子状のピットであり、全形は確認していないが上層の観察よりそれぞれ別個のものであると思われる。遺物が出土したのは東側のピットであり、径30.6cm、深さ35cmを測る。47は須恵器の有台杯底部である。高台高は1.8cmと高く、回転ヘラ切痕を丁寧にナデ消した底部中央にしっかりとした筆跡で「中」の墨書が見える。

ＳＰ－２（第10図48）

調査区南側の西壁際に接して存在するピットであり、長軸47.4cm、深さ18cmの浅い楕形を呈する。48は身の深い有台杯であり、底部より外傾して直線的に立ち上がる。

ＳＰ－３（第10図49・50）

ＳＰ－２の北東1.3ｍに位置する長軸63cm、短軸53.4cm、深さ43cmを測る略楕円形のピットであり、西側にテラスを持つ。49は椀に近い形態の杯である。大きく外に開く体部は内湾して立ち上がり、端正な端部へ続く。50は内外面に赤彩を施す椀である。大きく開く体部は端部をやや外展して収める。

ＳＰ－４（第10図51）

調査区中央南側に位置する複合ピットであり、本体は長軸51.6cm、短軸30cm、深さ43cmを測る楕円形を呈する。51は杯底部であり、器肌は非常に滑らかである。

ＳＰ－５（第10図52）

調査区中央の西壁際に位置する長軸63.6cm、短軸55.2cm、深さ14cmを測る不定形のピットであり、南西側にテラスを持つ。52は体部中程を欠くものの図上復元可能な土師器の中型甕である。強く屈曲する口縁部は端部を内屈ぎみに仕上げ、径の大きな平底の底部には回転糸切痕が明瞭に残る。

ＳＰ－６（第10図53・54）

ＳＰ－５の北東側1.9ｍに位置する複合ピットであり、遺物を出土した南側のピットは長軸48.6cm、短軸36.6cmを測る略方形を呈し、深さは28cmである。53は須恵器甕の口縁部であるが端部を欠く。太い突帯の下に３条の波状文が見える。54は鞴の羽口片である。図上下端に多量の鉄分が付着しており、端部に近いものと思われる。製鉄関連の遺物であるが、周辺からは関連する遺構や鉄製品、鉄滓等は確認されていない。

ＳＰ－７（第10図55・56）

調査区中央北端に位置する楕円形のピットであり、長軸47.4cm、短軸36.6cm、深さ29cmを測る。55は杯蓋の口縁部である。嘴状を呈する端部は強く屈曲し、先端を丸く収める。56は杯体部である。外傾して開く体部は口唇部でやや内湾ぎみに仕上げる。

ＳＰ－８（第10図57～60）

ＳＰ－７の北東隣に位置する大型の楕円形を呈するピットであり、長軸推定で114cm、短軸89.4cm、深さ59cmを測る。図示した遺物はいずれも須恵器であり、59は盤である。57は体部中程に轆轤ナデによる痕跡を強く残す。58は外反する口縁部を先細りに仕上げる。60は底部小片である。

ＳＤ－１（第10図61・62）

調査区中央西寄りに位置する不定形の溝であり、深さ８cmを測る。遺物が出土した地点は西側の浅い落ち込み状を呈する所であり、溝遺構として扱うことには少々不安がある。61・62はともに須恵器の杯蓋である。62は端部に明瞭な返しを持たず、緩やかに伸びて丸く収める。

ＳＤ－２（第10図63）

調査区中央南側に位置する短い南北溝であり、幅25～41cm、深さ５cmを測る。63は小片ではあるが端正な形の須恵器盤である。底面の回転ヘラ切痕を丁寧にナデ消している。

SD－3（第10図64）

SK－1の北側に接する幅31cm、深さ8cmを測る短い溝であり、ラインから見ればSD－2と同一のものかも知れない。64は須恵器杯の底部である。1／4の遺存であるが器肌の磨耗が激しい。

SD－4（第10図65）

調査区中央北半に位置する南北溝であり、幅30～36cm、深さ7cm、長さ検出長で5.7mを測る最も溝らしい「溝」である。65は須恵器杯蓋の口縁端部である。端部の返しは明瞭ではなく、歪みの非常に大きい個体である。

SX－1（第10図66～74）

SK－1の北側に接する不定形の落ち込み状の遺構であり、深さ3～6cm程度のものである。内部に他の溝やピットが多数切り込んでいるが、平面プランの検出時にはそれらは確認できていない。東側に大きく広がる同種の遺構と併せ、緩い窪地に堆積した黒色土であったのかも知れない。遺物は9点図示しているが、内部のピットに含まれるものは無く、すべてその上面からの出土である。

包含層（第10図75～77）

当調査区の包含層からは遺物の出土は比較的少なく、図示し得たものは小片を含めた3点のみである。また、出土位置もやはりSK－1の周辺に集中している。75は須恵器の杯である。どっしりとした作りであり外傾して立ち上がる体部から端部を先細りに仕上げる。76は底径より盤の底部と思われる。77は内外面に赤彩を施した土師器の椀であるが小片のため口径に不安を残す。磨耗の顕著な個体である。

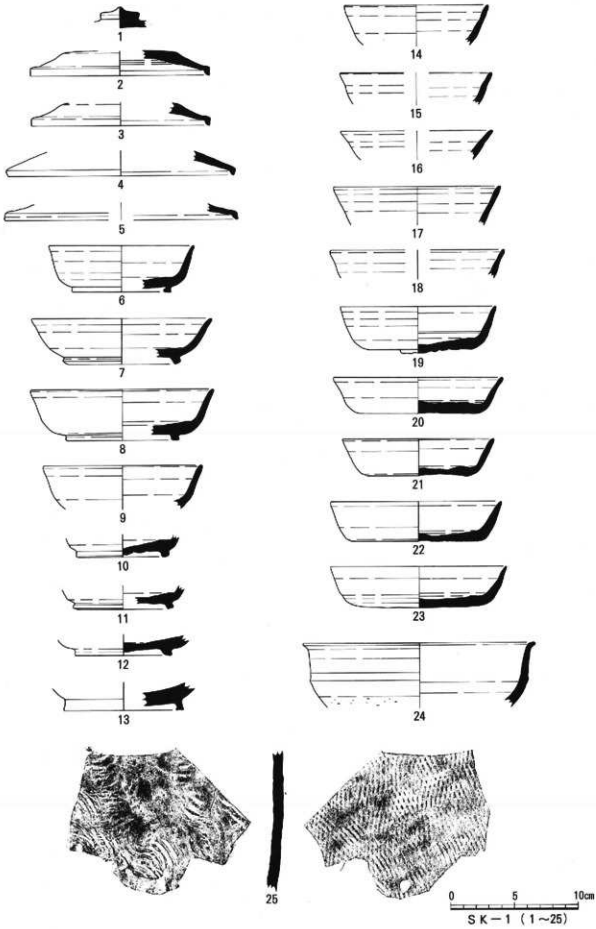
1　安　英樹　「第6章平成10年度の調査（末松A遺跡）」
『野々市町末松遺跡群』（財）石川県埋蔵文化財センター2000

2　横山　貴広　『下新庄アラチ遺跡』野々市町教育委員会1999
弧状した竪穴住居として扱っているが、規模や造りも同種のものが一定量確認されており、床面には焼土痕を持つものが通有である。

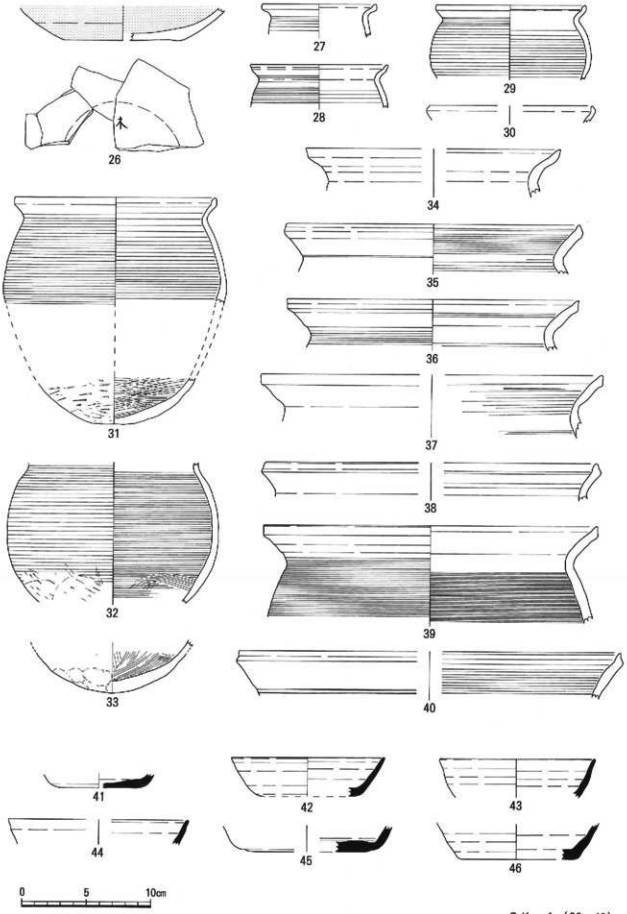
3　横山　貴広　『上林新庄遺跡・上林古墳・上林テラダ遺跡・下新庄タナカダ遺跡』野々市町教育委員会　2000
掘立柱建物の内側に囲まれる土坑としてSK－9512・9513等がある。

第3節　まとめ

今回の発掘調査は対象面積約80㎡と小さなものであり、単独でその性格にまで言及するには至らなかったが、末松A遺跡という広大な遺跡の一部であることは間違いなく、周辺の既往の調査結果と併せいずれは意味を持つものであることは確実である。主だった成果としては遺物の大半を出土したSK－1の検出がある。時期的には8世紀中葉から末のものである。既往の調査では、本調査区の東側に南北に走る国道157号線鶴来バイパス建設に際して石川県立埋蔵文化財センターが実施した成果があり、その評価は7世紀後半から9世紀半ば頃までの集落跡ということである。また、同センターが本調査区の西隣で平成10年に実施した成果も8世紀代を中心とする評価が与えられており、本件と概ね矛盾するものではない。後者は一部15世紀段階の時期も存在するが、本調査区SP－5より出土した土師器甕（第10図52）に見られるような、10世紀末段階の時期は空白のようである。

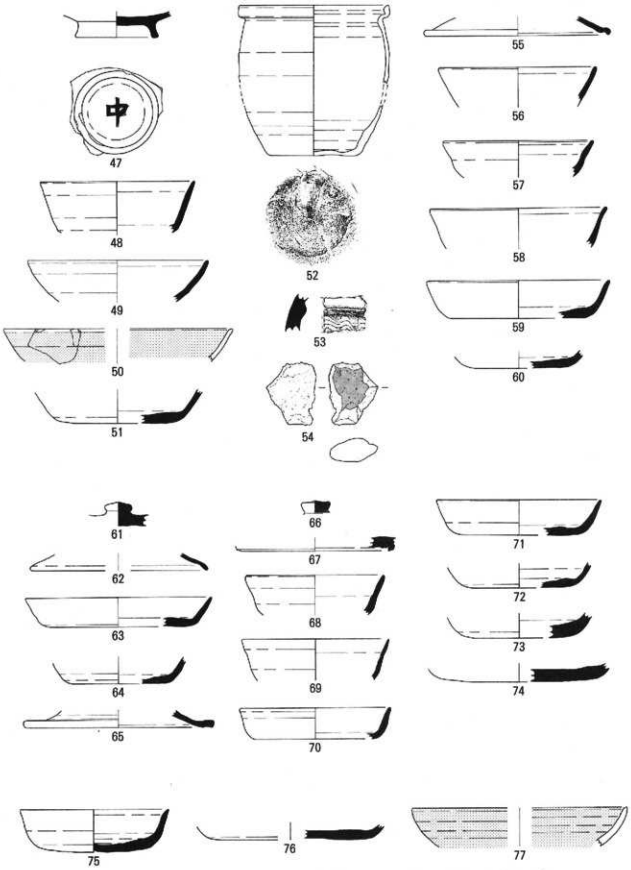


第８図　末松Ａ遺跡　遺物実測図①（Ｓ＝1/3）



ＳＫ－１（26～40）
同 上 面（41～46）

第９図　末松Ａ遺跡　遺物実測図 ②（Ｓ＝1/3）



ＳＰ－１（47）・ＳＰ－２（48）・ＳＰ－３（49・50）
ＳＰ－４（51）・ＳＰ－５（52）・ＳＰ－６（53・54）
ＳＰ－７（55・56）・ＳＰ－８（57～60）・ＳＤ－１（61・62）
ＳＤ－２（63）・ＳＤ－３（64）・ＳＤ－４（65）・ＳＸ－１（66～74）
包含層（75～77）

第10図　末松Ａ遺跡　遺物実測図 ③（Ｓ＝1/3）

遺物観察表

番号	器種	法量	調整	色調	焼成	胎土	遺存	備考
1	鉢	W：3.0	ナデ	灰色	並	S－2	完	外面自然釉
2	鉢	C：14.2	回転ヘラケズリ→ナデ ナデ	a：灰色 b：灰白色	並	S－2，M－1 黒色粒	1／4	外面自然釉
3	蓋	C：14.2	ナデ	a：灰色 b：灰白色	並	S－1，M－1 黒色粒	1／8	外面自然釉
4	蓋	C：18.0	ナデ	a：灰色 b：灰白色	並	S－2	1／3	外面自然釉
5	蓋	C：(18.6)	ナデ	灰色	並	S－1	小片	
6	有台杯	C：11.5 B：7.8 H：3.7	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰色	並	S－2，M－1 L－1	1／3	
7	有台杯	C：14.3 B：9.4 H：3.7	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	a：灰色 b：灰白色	並	S－2，M－1	1／7	
8	有台杯	C：14.5 B：9.0 H：4.1	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	a：暗灰色 b：灰色	並	S－1 細砂粒	1／5	
9	杯	C：12.6	ナデ	灰白色	不良	S－2，M－1 石英	1／7	
10	有台杯 （底部）	B：7.3	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	a：灰色 b：黄灰色	並	S－1，M－1	1／2	
11	有台杯 （底部）	B：8.0	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	a：灰色 b：灰白色	並	S－1，M－1	1／6	
12	有台杯 （底部）	B：7.7	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	a：暗青灰 b：灰色	並	S－2	1／4	
13	有台杯 （底部）	B：9.4	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	黄灰色	並	s－2 黒色粒	1／4	
14	杯	C：11.4	ナデ	a：暗灰黄 b：灰黄色	不良	S－1，M－1	1／7	
15	杯	C：(12.0)	ナデ	黄灰色	並	S－3，M－1	小片	
16	杯	C：(12.0)	ナデ	灰黄色	不良	S－2，M－1	小片	
17	杯	C：13.2	ナデ	a：赤褐色 b：褐灰色	不良	S－2，M－2 L－1	小片	
18	杯	C：13.8	ナデ	a：青灰色 b：黄灰色	並	S－2	小片	
19	杯	C：12.4 B：8.7 H：4.1	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰白色	不良	S－2，M－1	2／3	
20	杯	C：13.4 B：9.0 H：2.9	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	a：灰白色 b：灰色	良	S－2，M－1	2／3	
21	杯	C：12.0 B：9.1 H：2.95	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰白色	不良	S－1，M－2 L－1	1／3	磨耗顕著
22	杯	C：13.5 B：11.0 H：3.2	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰白色	不良	S－2，M－1	小片	磨耗顕著
23	杯	C：14.1 B：11.1 H：3.35	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰色	並	S－2，M－1	1／2	
24	稜碗	C：18.4 W：17.3	ナデ ナデ、ケズリ	淡灰色	並	S－2，M－1 黒色粒	小片	
25	甕		平行タタキ 同心円タタキ	a：暗灰色 b：灰白色	並	S－2 黒色粒	小片	
26	椀	B：9.2	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	明褐灰色	良	S－2，M－1	1／4	内外面赤彩 墨書「□木」有り
27	甕	C：8.9 N：7.6	ナデ カキ目・ナデ	濁橙色	並	S－1，M－2 L－2	小片	

番号	器種	法量	調整	色調	焼成	胎土	遺存	備考
28	甕	C：10.8 N：9.5	ナデ カキ目	濁橙色	並	S－1, M－1	1／7	
29	甕	C：11.6 N：10.6 W：12.6	ナデ カキ目	濁黄橙色	並	S－2, M－2	1／6	
30	甕	C：(12.7)	ナデ	濁橙色	並	S－2 赤色粒	小片	
31	甕	C：15.8 N：14.4 W：17.6 B：3.4 H：18.0	ナデ カキ目 ケズリ・ハケ	濁橙色 褐色・橙色	並	S－3, M－3 L－1	3／5	第1・2層で接合
32	甕	N：13.4 W：16.1	カキ目 ケズリ・ハケ	黄橙色	並	S－2, M－2 赤色粒	1／7	炭化物付着
33	甕 (底部)		ナデ・指頭圧痕 ハケ	橙褐色 浅黄橙色	並	M－1, L－1 赤色粒	2／3	磨耗顕著
34	甕	C：(20.0) N：(16.4)	ナデ	浅黄色	並	S－2, M－2 赤色粒	小片	磨耗顕著
35	甕	C：23.0 N：20.4	ナデ カキ目	濁黄橙色	並	S－2, M－2 赤色粒	小片	内面磨耗
36	甕	C：22.8 N：19.0	ナデ・カキ目 ナデ・カキ目	浅黄橙色	並	S－3, M－2 L－1	小片	
37	甕	C：(26.8) N：(23.0)	ナデ カキ目	濁褐色 濁橙色	並	S－1, M－2 赤色粒	小片	磨耗顕著
38	甕	C：(26.0) N：(21.4)	ナデ	濁黄橙色	並	S－2, M－2	小片	
39	甕	C：26.2 N：22.5	ナデ カキ目	濁黄橙色	並	S－1, M－2 L－1	小片	
40	甕	C：(30.0)	ナデ カキ目	浅黄橙色	並	S－1, M－2	小片	
41	杯 (底部)	B：7.6	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰黄色	並	S－2, M－1	1／4	
42	杯	C：12.1 B：7.9 H：(3.1)	ナデ	灰色	並	S－2	1／8	煮焼痕有
43	杯	C：12.2	ナデ	青灰色 灰色	並	S－1, M－1 L－1	1／8	
44	杯	C：(14.2)	ナデ	灰色	並	S－1	小片	
45	杯 (底部)	B：(11.0)	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰白色 灰色	並	S－2, M－1	1／6	
46	杯 (底部)	B：9.2	ナデ 回転ヘラ切・ナデ	灰色 灰白色	不良	S－1	1／5	
47	有台杯 (底部)	B：6.6	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	オリーブ灰色	並	S－2, M－1 石英	完	墨書「中」有り
48	杯	C：12.0	ナデ	暗灰色 灰黄色	並	S－1	小片	
49	杯	C：14.2	ナデ	浅黄色	並	S－2, M－1	1／7	内外面赤彩（端部無彩）
50	椀	C：(18.0)	ナデ	濁黄橙色	並	S－2	小片	胎土滑らか
51	杯 (底部)	B：7.0	ナデ 回転ヘラ切・ナデ	濁橙色	並	S－2 赤色粒	小片	・部剥離 図上復元 炭化物付着
52	甕	C：11.8 N：10.8 W：11.8 B：6.8 H：(12.0)	ナデ 回転糸切	暗灰褐色	並	S－1, L－1 石英	2／3	
53	甕		ナデ	灰色 オリーブ灰色	並	S－3, M－1	小片	端部鉄分付着
54	鞴羽口	L：(5.1) W：(3.9) D：(1.9)		黒色 橙色		S－2	完	重量20 g

番号	器種	法量	調整	色調	焼成	胎土	遺存	備考
55	甕	C：14.8	ナデ	オリーブ灰色	並	S－1，L－1	小片	重焼痕有
56	杯	C：12.5	ナデ	灰色 オリーブ灰色	良	S－2，L－1	小片	外面端部自然釉
57	杯	C：11.8	ナデ	暗青灰色 灰色	並	S－1	小片	
58	杯	C：14.0	ナデ	灰色 オリーブ灰色	並	S－1，M－1	小片	重焼痕有
59	盤	C：14.4 B：10.6 H：3.0	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	オリーブ灰色	並	S－1，L－1	小片	
60	杯 （底部）	B：6.8	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	オリーブ灰色	並	M－1，L－1	1／3	
61	蓋	W：2.1	ナデ 回転ヘラケズリ	淡橙褐色	不良	S－1，L－1	完	
62	蓋	C：(13.8)	ナデ	灰色	並	S－1	小片	重焼痕有
63	盤	C：14.6 B：12.0 H：2.35	ナデ 回転ヘラ切・ナデ	灰黄色	並	S－1，M－1	小片	重焼痕有
64	杯 （底部）	B：7.2	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	暗灰色	並	S－1，M－1	1／4	磨耗顕著
65	蓋	C：15.0	ナデ	オリーブ灰色	並	S－1，M－1	1／8	歪み大
66	蓋	W：2.3	ナデ	灰色	並	M－1	完	
67	有台杯 （底部）	B：11.6	ナデ	暗灰色 灰色	並	S－1	小片	外面自然釉（薄）
68	杯	C：10.8	ナデ	暗灰褐色 黄灰色	不良	S－2，M－1	小片	
69	杯	C：11.6	ナデ	暗灰色 灰色	良	S－2	小片	外面降灰
70	杯	C：12.0 B：9.4 H：2.5	ナデ	暗灰色 オリーブ灰色	良	S－2	小片	外面降灰
71	杯	C：13.0 B：8.8 H：2.8	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰色 オリーブ灰色	並	S－3，M－2	1／6	重焼痕有
72	杯 （底部）	B：7.4	ナデ 回転ヘラ切・ナデ	灰色	並	S－1，M－1 L－1	1／4	
73	杯 （底部）	B：6.8	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰白色	不良	S－1，L－1	1／3	磨耗顕著
74	杯 （底部）	B：8.4	ナデ 回転ヘラ切・ナデ	灰白色	不良	S－1	1／4	磨耗顕著
75	杯	C：11.8 B：8.9 H：3.4	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	明青灰色 灰色	良	S－2，M－1 L－1	2／5	重焼痕有
76	盤 （底部）	B：(12.5)	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰白色	並	S－1 石英	1／4	
77	椀	C：(16.8)	ナデ	浅黄橙色	並	S－1	小片	内外面赤彩 磨耗顕著

凡例　**器種**　土師質土器や陶器器類については土師器の表現法を踏襲したが，表中にその旨を標記している。

法量　単位はすべてcmで統一し，Cは口径を，Nは頸部径を，Wは胴部最大径を，Bは底径を，Hは器高を表している。また，土器以外のものについてはLは全長を，Wは最大幅を，Dは厚さを表している。表中（　）で囲ったものについては推定値である。

調整　基本的に上位のものを上段に，下位のものを下段に記しているが，一部外面を上段に，内面を下段に記しているものもある。また，色調については外面を上段に，内面を下段に記している。

胎土　組織については粒の大きさをS（1mm以下），M（1～3mm），L（3mm以上）とし，量を1（少量含む），2（やや多い），3（多い），で表した。また，土師器については海綿骨片などの土壌そのものに関わるものや，赤色粒などの混和材に関わるものも併せて記入した。

遺存　実測図に対する遺存状態を示している。

第３章　末松しりわん遺跡

第１節　調査の経緯と経過

町域の南西端に当たる野々市町末松１丁目地内に所在する末松しりわん遺跡は、第２章で述べた末松Ａ遺跡調査区の南西約240ｍに位置するが、大局的に見れば国道157号線に沿って細長く広がる島状微高地上に営まれた広大な同遺跡南端のすぐ西隣に当たる。県営農村活性化住環境整備事業に先立ち、石川県立埋蔵文化財センターにより実施された埋蔵文化財分布調査により新たに発見された遺跡であり、町教育委員会では周辺に残る小字名を参考に「末松しりわん遺跡」と命名し、平成８年４月10日付で57条の３第１項の通知を行った。遺跡の主体は本調査区の北側に伸びるようである。

末松しりわん遺跡は地方特定道路整備事業町道整備工事（当時末松徳光線と呼称）を原因として実施された発掘調査であり、調査区の決定については道路建設予定地が遺跡推定地の南半に当たることから、上記の埋蔵文化財分布調査によって得られた成果を十分に活用させて頂いた。事前の担当者レベルでの協議を経た後、平成８年９月13日付発野土第89号で町産業建設部土木課長より町教育長に宛てて調査依頼が提出され、同26日付収野教文第125号で調査対象面積を工事によって破壊される部分の約700㎡に設定し、９月25日より調査に着手する旨の回答を行っている。また、同年９月24日付発野教文第49号で文化財保護法第98条の２第１項の通知をおこない本調査への準備を整えた。現地における調査区の設定時点で、対象地には事業に関連して取り回しを変更された基幹となる仮設農道及び用水が大きく干渉しており、住民利用の便宜を図るため予定地の中心約150㎡を先行して調査し、他の部分については農閑期を待って着手することで開発側の同意を得た。なお、現地での調査にあたっては、同一路線であるがふるさと農道緊急整備事業（原因者―野々市町農政課）として実施した末松Ａ遺跡と平行して行ったため、作業の進行状況や工程、天候により調査地の頻繁な移動を行っている。そのため調査工程の記述には少々煩雑な部分もあるが、ご了解願いたい。その後の経過については以下のとおりである。

〈調査日誌抄〉

９月30日（月） 表土除去作業開始。

10月１日（火） 表土除去作業終了。通常の地山とは明らかに異なるが、小砂利を含む硬い整地層（第３層）と思われる面を確認したため以降を人力による掘り下げに切り替える。機材等搬入、調査区周辺除草作業。

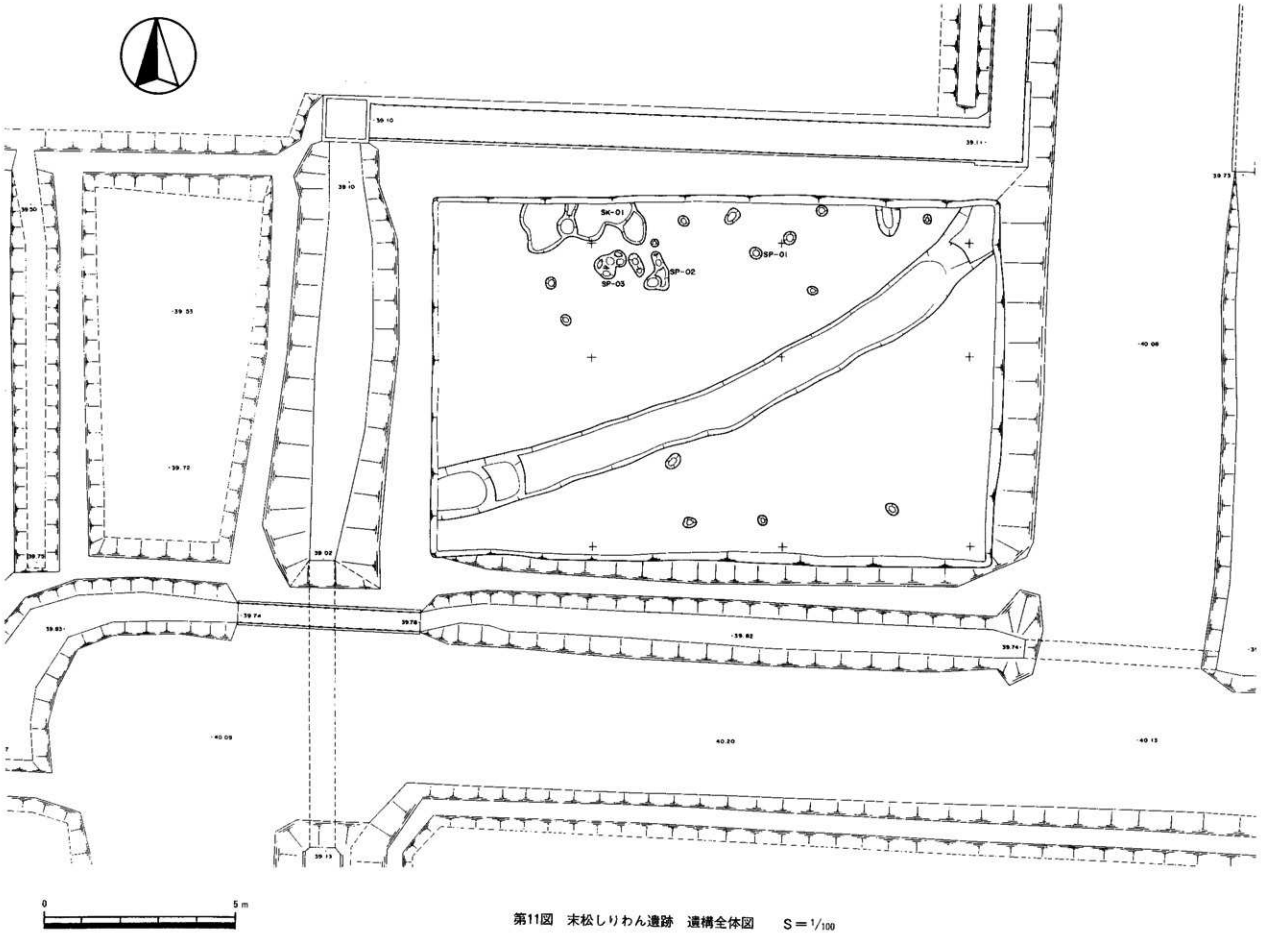
10月４日（金） 整地層掘り下げ終了。前日に柄鏡、キセル吸い口が出土した以外は遺物の確認は無し。続けて第４層の掘り下げに着手。この層については上層整地以前の旧田面に当たるものと思われる。

10月９日（水） 第５層掘り下げ開始。平行して最上面より確認されていた現代の暗渠用水の掘り下げを進める。ポリ製暗渠管確認。

10月15日（火） 第５層掘り下げ終了。奈良・平安期の遺構面精査。若干のピットと土坑１基を確認。

10月18日（金） 遺構完掘。調査区周辺の草刈を実施し、遺構写真撮影。遺構平面・土層堆積状況実測作業開始。必要最小限の機材を残し他は撤収。

10月22日（火） 遺構図・土層図作成完了。以降はしばらく並行して実施している末松Ａ遺跡の調査に専念する。



第11図　末松しりわん遺跡　遺構全体図　S＝1/100

11月27日（水）末松Ａ遺跡の第１回目の航空測量にあわせ、空中写真の撮影及び周辺地形の現況測量を依頼する。

12月19日（木）末松Ａ遺跡後半調査部分の表土除去終了後、本調査区の埋め戻しに着手、１日で終了する。本日で現場作業すべて終了。

事務的な整理も目処のついた平成９年２月10日、発野教文２・３号で松任警察署長・石川県教育委員会に宛てて埋蔵文化財発見届、同保管書をそれぞれ提出し、今年度の事業を終了した。その後洗浄・選別・接合・復元作業を当年度に、実測・トレース作業を平成12年10月から12月にかけて実施している。

発掘調査参加者　伊藤　忠行・猪又　邦子・遠藤外茂義・大知　時子・川村　和夫
北出　貞子・北村三千子・栗山　久・古源　きよ・小林　幸子
小柳　幹男・進村　五月・多村　渉・寺本　昭夫・藤部　純子
中川　紀子・長田外美子・西本　光江・彦田　洋子・佛田　正子
宮川　英子・三口　清枝・山岸　吉男・谷内　茂代・吉本　智子

整理作業参加者　（洗浄・選別・接合・復元）
伊藤　忠行・猪又　邦子・彦田　洋子・佛田　正子・谷内　茂代
（実測・トレース）
竹田　倫子・野村　祥子

第２節　遺構と遺物

前節でも述べたとおり、当遺跡の調査予定面積は当初計画の段階では700㎡であったが、先行して着手した中央部分の調査を終了した段階で検出された遺構、遺物はごくわずかであり、残りの部分についての調査実施の必要性を検討した結果、盛土後砕石を敷いた基幹農道、農業用水を現段階で取り壊してまで調査する必要はないと判断し、中央部分のみの調査で事業の終了を決定した。結果的に実調査面積は約150㎡となる。検出された遺構は最下層に当たる古代の検出面でピット19基、土坑状の落ち込み１基であるが、ほとんどが明確に遺構と判断できない薄い汚れ状の覆土であり、掘り方の曖昧な浅いものである。また、近世末から近代初頭の整地と思われる第３層については遺構の痕跡は皆無であった。なお、遺構全体図（第11図）上で南西から北東側に向けて中央を貫流している溝は現代の暗渠排水である。遺物については出土した遺構がピット３基（ＳＰ－１～３）、土坑１基（ＳＫ－１）にとどまり、いずれも土師器甕の胴部小片１～２点であり、図示に耐えるものは存在しない。実測し得たものは18点であり、第13図18を除きいずれも第３～５層を掘り下げる段階で出土したものである。18は調査区西隣の田よりの表採品である。

SK－1（第12図）

調査区北辺のやや西側に位置する不定形の浅い落ち込み状遺構であるが、本書では土坑として扱っている。長軸2.96m、深さ最大で8cmを測り、内部に先行すると思われるピット及び細い溝状遺構が各1基存在する。全周にわたり掘り方にシャープさを欠き、意匠を明確にとらえ難いものである。遺物は図上西側より出土している。轆轤成形による土師器甲甕であるが図化に耐えない小片であり、磨耗の激しい個体である。

SP－1

調査区中央北側に位置する径30cm、深さ56.5cmを測るしっかりとしたピットである。遺物は2点出土しているが、いずれも極小片であり、器壁の厚さより土師器甕と知れるのみである。

SP－2（第12図）

SK－1の南東側に隣接する複合ピットであり、遺物が出土した南側ピットで径46cm、深さ23cmを測る。轆轤成形による土師器甕の胴部小片1点が出土している。

SP－3（第12図）

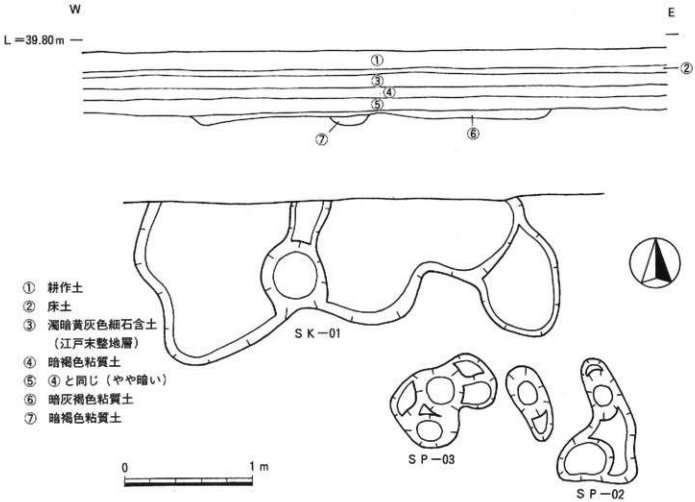
SP－2の西側に位置する複合ピットであり、主体となる中央ピットで径43cm、深さ20cmを測る。遺物は器種不明であるが、同一個体と思われる厚手の土師器体部小片2点が出土している。

その他の遺物（第13図1～18）

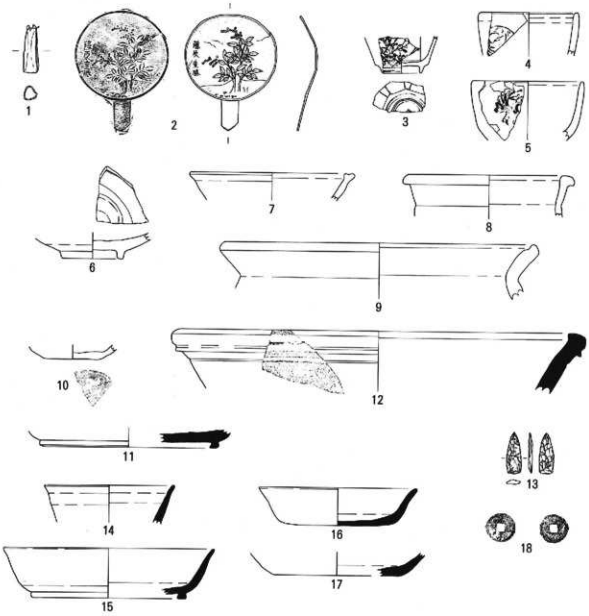
1はキセルの吸い口であり、2は小型の柄鏡である。共に銅製品であり、第3層整地層を掘り進む段階で屋内部より出土したものである。2は鏡背側に強く歪曲しており、鏡面は汚れてはいるものの一部に依然画像を写し出すほど保存状態が良い。背面に藤原重勝銘が鋳出されている。3は西洋コバルトの染付碗であり、明治期のものである。5はコンニャク印判の染付磁であり、6は蛇の目釉剥ぎの染付皿である。共に18世紀代のものである。7は瀬戸美濃系の瓦皿であり、9は越前焼の甕である。3～9についてはいずれも整地層直下の暗褐色土（旧耕作土）内より出土したものである。10は瀬戸美濃系の糸切皿である。11・12、14～17はいずれも須恵器である。かなりの時期的なバラツキが看過され、7世紀中頃を上限とし、9世紀初頭頃のものまでが含まれる。18については完形ではあるものの状態が悪く、種類を判別できるものではない。

第3節　まとめ

今回の調査区は末松しりわん遺跡としては南側縁辺にあたり、確認された遺構、遺物の内容も質・量ともにその性格を窺うには不十分なものであった。石川県立埋蔵文化財センターが実施した事前の埋蔵文化財分布調査の結果でも遺跡の中心は北側にあることが確認されており、現状は田として保存されている。また、耕作土直下で確認された近代初頭と思われる整地層については、明治期には何らかの建造物が存在したことを示すものであるが、現在の末松集落（末松1丁目）や旧蠧集落（末松2丁目）からはかなりの距離があり、当時この地点にまで集落が広がっていたとは考え難い。地元の人の話では、現在集落内にある神社が昔は南側へ大きく広がっていたそうであり、周辺の古地図にも「しりわん」の子字名と並び「神社前」、「神山塚」などの記述が見える。断定する必要性は感じないが、神社域に関連した施設があった可能性が高そうである。



第12図　主要遺構基本土層実測図（Ｓ＝1/30）



包含層　第３層（１・２）
第４層（３～９）
第５層（10～13）
地山直上（14～17）
表　採（18）

第13図　末松しりわん遺跡　遺物実測図

遺物観察表

番号	器種	法量	調整	色調	焼成	胎土	遺存	備考
1	キセル	L：3.9 W：1.25 D：1.0					完	吸口・銅製 緑錆 重量4.7g
2	銅鏡	L：9.3 W：7.3 D：0.1					完	銅製・宮曲 藤原重勝銘 重量40g
3	染付碗	B：3.0		素地灰白色	良	精良	1／3	染付鮮青色
4	染付碗	C：7.8		素地灰白色	良	黒色粒	1／8	染付濁青色
5	碗（伊万里）	C：8.4		素地灰白色	良	黒色粒	小片	コンニャク印判
6	台付皿（染付）	B：5.0	回転ヘラ切→ナデ	素地灰白色	良	精良	1／5	
7	瓦皿（瀬戸美濃）	C：13.0		素地浅黄色	良	S－1	小片	灰釉
8	壺	C：12.8	ナデ	素地灰色	良	S－2, M－1	小片	オリーブ灰色
9	壺（越前）	C：24.4 N：20.8	ナデ	暗赤褐色 暗褐色	並	S－1	小片	外面端部剥離
10	皿（瀬戸美濃）	B：4.4	ナデ 回転糸切	灰黄褐色	良	S－1, M－1	1／6	一部暗褐色釉付着
11	有台杯（底部）	B：13.6	ナデ	灰色	並	S－2, M－2	小片	墨縄顕著
12	甕	C：31.0	ナデ	暗青灰色 灰色	並	S－1, M－2	小片	
13	石鏃	L：3.3 W：1.1 D：0.35				黒色頁岩	完	無頸
14	杯	C：10.4	ナデ	オリーブ灰色	並	S－1, M－1	小片	重焼痕有
15	有台杯	C：16.2 B：12.0 H：4.0	ナデ	暗オリーブ灰 浅黄橙色	不良	S－2, M－1	小片	
16	杯	C：12.4 B：6.2 H：3.0	ナデ 回転ヘラ切→ナデ	灰色 明橙褐色	不良	S－2, M－1 L－1	1／6	重焼痕有 外面自然釉
17	杯（底部）	B：9.8	ナデ	灰色	並	S－1, M－1 L－1	1／8	
18	銅銭	径：2.2					完	表採資料 磨耗激しく判別不能

凡例　器種　器種については一般的な名称を記すにとどめ、須恵器、土師器の別は実測図中で前者を断面黒塗りで、後者を白抜きで表現している。また、珠洲焼など須恵器系のものについても断面黒塗りとし、上師質土器や陶磁器類については土師器の表現法を踏襲したが、表中にその旨を標記している。

法量　単位はすべてcmで統一し、Cは口径を、Nは頂部径を、Wは胴部最大径を、Bは底径を、Hは器高を表している。また、上器以外のものについてはLは全長を、Wは最大幅を、Dは厚さを表している。表中数字を（　）で囲ったものについては推定値である。

調整　基本的に上位のものを上段に、下位のものを下段に記しているが、一部外面を上段に、内面を下段に記しているものもある。また、色調については外面を上段に、内面を下段に記している。

胎土　細礫については粒の大きさをS（1mm以下）M（1～3mm）L（3mm以上）とし、量を1（少量含む）2（やや多い）3（多い）で表した。

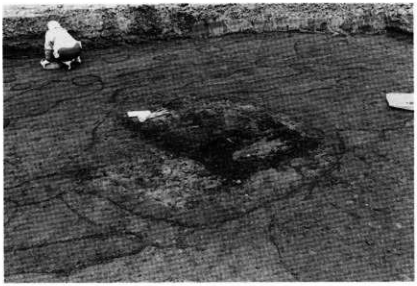
遺存　実測図に対する遺存状態を示している。

調査着手前状況（北東より）

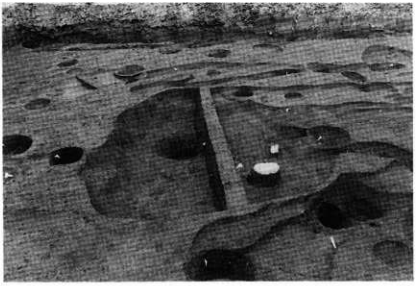
表土除去後状況（東より）

遺構検出状況（北より）

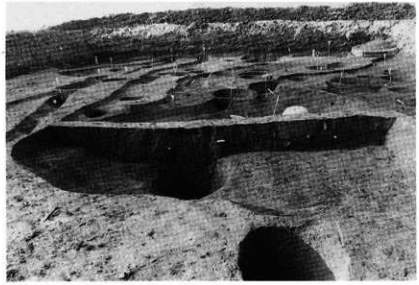
末松A遺跡調査写真 ①



ＳＫ－１　検出状況（南東より）

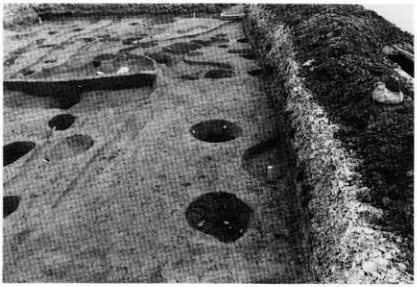


ＳＫ－１　完掘状況（東より）



ＳＫ－１　土層堆積状況（南より）

末松Ａ遺跡調査写真 ②



調査区東辺ピット配列状況（南より）

ＳＸ－１　完掘状況（南東より）

調査区全景完掘状況（南より）

末松Ａ遺跡調査写真 ③

図版4　末松A遺跡出土遺物

2

19

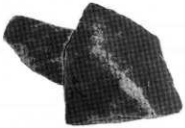
21

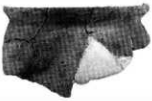
6

20

10

24


26


31

39

47

57

52

71

75

包含層掘り下げ状況（東より）

← 整地層

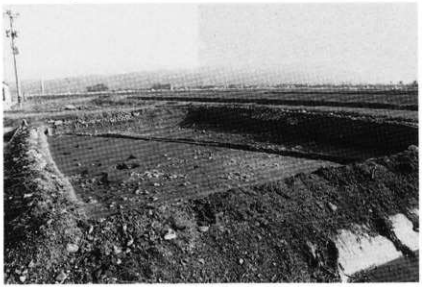
基本層序（北西）

北半遺構検出状況（西より）

末松しりわん遺跡調査写真 ①

ＳＫ－１　完掘状況（北西より）

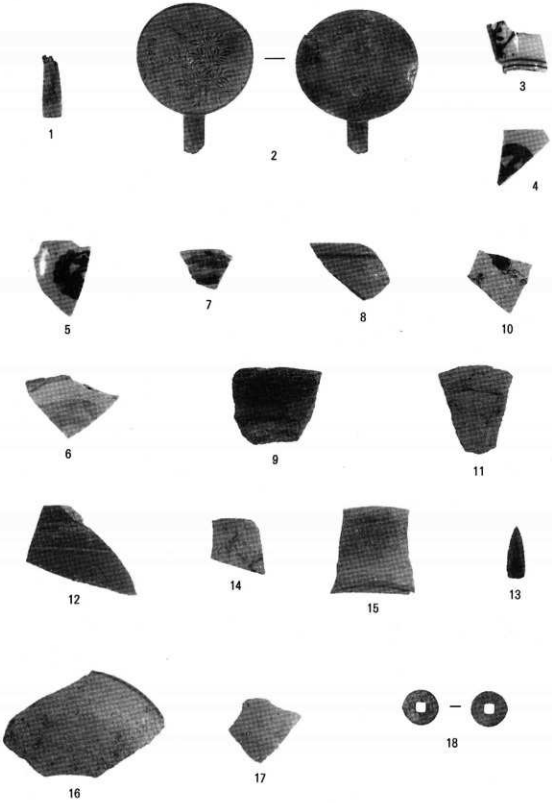
ＳＰ－２・３　完掘状況（北より）



調査区全景完掘状況（北西より）

末松しりわん遺跡調査写真 ②

図版7　末松しりわん遺跡出土遺物



報告書抄録

ふりがな	すえまつ いせき すえまつ いせき
書名	末松A遺跡・末松しりわん遺跡
副書名	民間開発・地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
編著者名	横山貴広
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	〒921－8815 石川県石川郡野々市町本町5丁目4番1号 ☎ 076－248－8545
発行年月日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
すえまつ 末松A	いしかわけんいしかわぐんのいちまちすえまつ 石川県石川郡野々市町末松1丁目153－1	17341	16009	36° 30′ 15″	136° 35′ 52″	19920402 ～ 19920417	80	農作業場建設に伴う発掘調査
すえまつ 末松しりわん	いしかわけんいしかわぐんのいちまちすえまつちょうめ 石川県石川郡野々市町末松1丁目地内	17344	－	36° 30′ 7″	136° 35′ 52″	19960930 ～ 19961219	150	地方特定道路整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
末松A	集落	奈良・平安	土坑・ピット 溝	須恵器・土師器	8世紀中葉～末の大型土坑を検出
末松しりわん	集落	奈良・平安 近世・近代	土坑・ピット	銅製柄鏡 銅製キセル 須恵器・土師器・中世土器 近世・近代陶磁器	最下層で奈良・平安時代の遺構面を確認 床土直下で近代初頭の整地層を確認

末 松 A 遺 跡
末松しりわん遺跡

発　　行　2001年３月
編集発行　野々市町教育委員会
〒921-8815
石川県石川郡野々市町本町５丁目４－１
☎ 076-246-2344
印　　刷　㈱アサヒヤ印刷